

文学共和国のアメリカ像

宇 京 頼 三

前に触れたように、一九世紀前半のフランスとアメリカの関係はいわば弛緩期に入る。それは、フランス革命以後のヨーロッパ大陸における政治状況が、アミアンの和約（一八〇二年）により革命戦争が終結した後もすぐにナポレオン戦争が始まり、大陸封鎖、イギリスの逆封鎖、仏英戦争が再燃するなど複雑化したため、大西洋を挟む新旧大陸間の交流・通商が混沌としてきたからであろう。

しかし、とりわけフランス革命期の恐怖政治がもたらした失望感が双方の熱気を冷まし、さらにはナポレオンによるルイジアナ売却によって、アメリカ大陸との臍帯が決定的に途切れてしまったのである。そして、平和が戻っても、アメリカへのフランス人移民は増えることはなかった。

その間、反米的・反新大陸的な感情や見方も前よりは和らいだとはいえ、基本的には変らなかつた。バルザックやスタンダールの小説には、アメリカに対するネガティブな考え方の人物が登場する。例えば、『パルムの僧院』のモスカ伯爵は「あそこ（アメリカ）には、オペラ座もない」と馬鹿にするし、アメリカ亡命中のタレーラン侯はスタール夫人に「こんなところに一年もいたら、死んでしまいますよ」と書き送ったという。

だが、時が経つにつれ、フランス人のアメリカ観も徐々に変化し、新たな視点が生まれてくる。つまり、前世紀後半の新大陸に対するいわれなき「博物誌的」偏見が薄れ、また制度モデルとしてのアメリカ共和国体

制への共感も弱まり、代わって「美的」ともいえる反米的言説が現れるのである。そしてこれが二〇世紀の「文化的」反米感情の礎石となっていく。こうしたフランスのアメリカ観の推移を少し詳しく辿ってみよう。

仏米関係は、前述したように、独立戦争、フランス革命という蜜月期間を経て、米英間のジェイ条約を境に悪化するが、フランス国内でも対米感情が微妙に変化しつつあった。一八世紀末になって、新興アメリカの共和主義への共感から新大陸へ渡っていた人々が帰国し、アメリカ報告・批評の書物を著わすようになると、その実体が段々と明らかにってきた。

とりわけ、フランス革命の嵐を避けてアメリカに渡ったフランス人亡命者は現実を目の当たりにし、なかには独立戦争で戦った者もいた。彼らは若いアメリカの「デモクラシー」に関心を持ち、この政治・社会体制がどのような影響関係をもたらししているかを実体に即して考えようとしたのである。そして彼らは、それを政治的・経済的・社会的現実からだけではなく、文学的・哲学的・芸術的成果や、さらにはそれが風俗、「礼儀作法」、行動様式などに与えた結果からも見ようとした。新興独立国アメリカへの期待を込めて。

しかるに、その彼らが一樣に、アメリカの経済発展がもたらした物質的な進歩には、洗練された趣味や精神の栄える王国の高みに、とまでは

言わなくとも、芸術や文学一般の進歩が伴わない、むしろそれを犠牲にしている、と主張したのである。彼らの失望は大きかった。なぜなら、彼らは「若き共和国」アメリカに、一般的かつ持続的な人類の進歩という思想の実験場を期待していたからである。それが、「一にして不可分」という共和国理念にも挫折感を味わい、「進歩は一にして不可分」という希望にも裏切られたのである。もっとも、パリの華やかな社交サロンから抜け出た彼らが、異郷の新興国アメリカ生活の退屈さや味気なさ、その俗物性に嫌悪感を催したのは当然であろうが。

なお、こうした革命期から一九世紀初頭にかけての亡命者については、アルベール・ティボーデ著『フランス文学史』に興味深い指摘がある。それによると、「一七世紀末および一八世紀末のフランス文学が呈したヨーロッパ的性格は……ともに二つの亡命の潮流に基づいている。しかもこれら二つの亡命の潮流は原因を同じくし……知的選良の亡命という同じ結果に到達した」という。この二つの亡命とは、前者はナントの勅令廃止後の新教徒（ユグノー）の、後者は大革命時代の亡命のことである。

ただし、両者には大きな相違があり、前者の場合は亡命者が避難先に留まらざるを得なかったのに対し、後者は「トロイ戦争の期間（一〇年間）とほぼ同じ期間を経て帰国したこと——これら亡命者の『遍歴』の結果には『帰来』がある」。そしてティボーデは「この亡命者たちは文学上に恩恵をほどこした」として、「ロマン主義運動の烽火」へと至るその文学史的意義を主張しているが、我々が注目すべきは、こうした亡命帰還者の中にアメリカ帰りのいたことである。みなが文学者というわけではないが、当時のフランス世論に対して彼らの果たした役割は大きかったのである。

また忘れてならないのは、彼らのほとんどが貴族の出自であったこと

である。ティボーデが言うように、古代の都市国家において、人民が貴族階級と闘争し、政権を奪取しても、人民には神々と都市を結ぶことが容易ではなかった。それは、「貴族が礼拝・儀典・献祭・占術の秘訣を所有」し、人民にはその奥義の心得がなかったからである。要するに、支配階級たる貴族が「知」や「文化」を独占していたのだ。

それは一七八九年の場合も同じことで、この時代、「各方面の貴族が文学芸術に関して、速成を許さない独特の慣習・奥義・好尚を握っていた」。たしかに、新大陸へは早くから鱈漁や毛皮取引をするフランス人が渡っており、彼らもそれなりの情報を持ち帰ってはいた。だがそれは噂とか風聞にすぎず、新大陸の地理・自然・社会に関する知識や情報はいずれも「知的選良」によってもたらされたのである。彼らは一般に、「探険家であると同時に植物学者や考古学者、科学者であろうとした」。

そうした状況のなかで、旧大陸の文明国の象徴たるフランス人一般の判断も厳しかった。アメリカ人の荒っぽい風俗・習慣、精神的な事柄への無関心、芸術一般へのまったくの無理解などが伝えられると、社会的風潮も批判的・否定的なものになった。だが、新大陸の未開地開拓に従事し、新国家の建設に刻苦専念する者に芸術鑑賞を求めることなど所詮無理な話である。ところが、当時の人々はそうは考えなかった。しかし今から見れば、ジーンズとカーボーイハット（または野球帽）に象徴されるアメリカ人のメンタリティがこの頃に端を発しており、そのような「相互不信」が今に繋がる仏米間の齟齬にも通じるように思われる。根は深いのである。

またこれは、フランス社会の進展、人心の変化に呼応するものでもある。概して、一八世紀末から一九世紀初頭にかけて、フランス社会で

は、ルソーの「自然」思想の影響も弱まり、啓蒙思想が遺した「人類の一般的な進歩」というイデオロギーへの関心も薄れつつあった。そこに、アメリカ共和国への失望感が加わったのである。もちろん、同時に、大西洋の向う側でも反仏感情が生まれているが。

ただ注目しておくべきは、フランスでは、こうした文脈から新たに反米的な常套句が生まれてきたことである。つまり、アメリカがどんなに進歩的な「デモクラシー」の国であっても、フランス人は生来、芸術や文学、遊びや美食、快楽を友としており、彼らにはそこでは幸福に暮らすことはできないだろう、というのである。シックなカフェやレストラン、コメディ・フランセーズやオペラ座のない人生なんて!というわけだ。そしてこうしたアメリカ観の地平の彼方に、近代物質文明・進歩としての「アメリカ化」を批判・拒絶するボードレールの姿が浮び上がってくる。ただし、『悪の華』の詩人が佇立する地平の手前にもさまざまなアメリカ観を有する人物像が居らぶ。

例えば、タレーラン侯は、アメリカとは? 「三二の宗教とたったひと皿の料理だ」と言っていたし、ヴォルネ伯爵は恐怖政治を逃れ、八九日間もかけて新大陸に渡りながら、対仏感情の悪化したアメリカでフランス人になされた「真のテロ」を経験したという。

また、アメリカを蛇蝎のごとく嫌った保守的な君主制・教皇至上主義者ジョゼフ・ド・メーストル伯爵のような者もいた。メーストルはフランス革命に反対し、民主主義を否定した筋金入りの反動であるが、その歴史観とモラリスト的思想は一七世紀のボッシュエに近く、後世の文学者には多くの影響を与えたという。思想・イデオロギーはともかく、ボードレールもメーストルに熱中した時期がある。「私〔ボードレール〕はものの考え方を、ド・メーストル及びエドガー・ポーから学んだ」(『火

箭』一七)。

だが、ギロチンを逃れてアメリカに亡命したこともあるタレーランが、反米感情に与えた影響はそれよりも大きい。このオータンの司教は、棄教後、革命期の立憲議会、総裁政府、執政政府、ナポレオン帝政、そして王政復古時代をフランス外交の代表として渡り歩き、その名声はヨーロッパ中に広がり、交友関係も豊かだったのである。

しかしながら、一九世紀初頭のフランスで、反米的な思想や感情だけがあったわけではない。前世紀から、ビュフォンを中心とした博物学的偏見だけでなく、「自然人 *le Sauvage*」信仰、新大陸への牧歌的イメージがコインの裏表のように並存しており、その残滓もあったのである。前述したように、一八世紀には、前世紀の流れを受け継いでキリスト教の布教を目的とした者や、ルソーやベルナルダン・サン・ピエールなどの影響を受けて原始的自然への憧憬から新大陸に渡る者、革命の動乱を逃れて新世界に亡命する者がかなりの数いた。

例えば、インディアンの旧約聖書の族長のイメージをだぶらせて熱狂したラフィットやシャルルヴォワなどの宣教師、アメリカの熱烈な賛美者で、若くして断頭台の露と消えたジロンド党の頭目ブリッソンなど：彼らが各々の立場から旅行記や報告書を介して、ポジティブなアメリカ観を形成していたのである。とくに、このジャック・ピエール・ブリッソン(一七五四—一七九三)は、革命前年、アメリカに行って、ペンシルヴァニアの憲法やヴァージニアの権利宣言などに感化されて帰国し、革命運動に邁進する。

もちろん、亡命・旅行先はアメリカだけではない。またこの時代、王侯貴族からして旅行好きであった。「ルイ一六世を継ぐブルボン王家のうち、ルイ一八世はロシアに、シャルル十世はスコットランドに滞在し、ル

イ・フィリップは北極圏内のスカンディナヴィアから更にアメリカに至った」という。有名無名の夥しい旅行記があったのである。なかでも特筆すべきは、やはりシャトーブリアン（一七六八—一八四八）であろう。

たしかに、詩人大臣 *ministre poète* という異称をもつフランソワール・ネ・シャトーブリアン子爵は、今日日本はおろかフランスでさえも、その著作の大半は忘れられている。だが彼は、一九世紀初頭、フランスの政治・社会の世界で大臣、大使などを務めて重きをなす一方、文学の世界では「ロマン派詩人の父」と言うよりは、彼らの古典作家」となった人物であり、その花綱模様のような壮麗な文体を駆使する、文飾・美文調の作家でもあった。

しかし、彼はたんなる文飾家ではなく、「文章の調和、リズム、運びによって」読者の感性に、想像力だけでは思い描けないようなものを「暗示する」喚起効果を持つ文体を備えた *Enchanteur*（ことばの魔術師）とも称せられる作家であった。なるほど、シャトーブリアンは「旧世界の旧フランスの旧弊なブルトン人」であったが、ナポレオンとともに革命期に成年に達した世代で、啓蒙思想の影響下に育ち、いわば「ルソーの弟子」であった。ただし、彼は単純に「ルソーの弟子」であったのではない。貴族階級に属する者として、彼には旧世界への愛着があり、一八世紀の新思想に共感を覚えつつも反発するという矛盾したところがあった。その彼に『アメリカ紀行』がある。

この自伝文学の傑作とされる『墓の彼方からの回想』の未来の作者は、一七九一年、故郷サン・マロの港から新大陸に向けて出帆する。時に二三歳。その構想は、カリフォルニア湾から太平洋岸を北上してベーリング海峡にまで達し、北極圏を回って大西洋に出て、ハドソン湾、ラブラドル、カナダの方へ帰るといふ壮大なものであった。前記ティボーデ

に言わせれば、「中学生の思いつきである」。だが、この途方もない夢物語はともかく、シャトーブリアンはアメリカ探検旅行から「自然児の叙事詩」を引き出したのである。

この『アメリカ紀行』は実際の旅行より三六年も後に発表されたもので、言うならば、二三歳の青年が行なった冒険物語を六〇歳になった老人が回顧して語るようなものであるが、それまでにこの旅行をもとに『ナチエズ』『アタラ』『ルネ』など、いわば「アメリカの自然人」インディアンを素材にした物語が生まれている。もちろん、彼は僅か五ヶ月のアメリカ滞在で、これらの小説中に描かれたことすべてを実際に見たり、経験したりしたのではない。借用や創作も多く、それは三〇〇年来蓄積されてきた探検家や宣教師の旅行記や物語の文学的達成と見なされるべきものである。

だが、シャトーブリアンの「アメリカへの異国趣味」は文学の世界のみならず、当時のフランス社会のアメリカ観、即ち「自然人の崇高さとアメリカ大陸の壮大さ」というイメージの転換にも大きな影響を与えたものと思われる。彼は、新大陸の自然をビトレスクな文体・表現で描きながらも、アメリカの若さや自然人の永世をそのまま信じたわけではなく、その実態を作家の目でしかと捉えている。

『アメリカ紀行』で、彼は、当時首都であったフィラデルフィアについて語りつつ、この町の外観は冷たく、単調であり、記念建造物、とくに古い記念建造物がないとして、「この社会は、今は立派でも、過去がない」「先祖も思い出もないこの社会にとって、唯一の記念建造物は牢屋である」と断じている。後述するように、これは、二〇〇年後のフランス人のサルトルがアメリカは広場も記念建造物もない、「砂漠の野営地」を原型として生まれた国であり、ボードリヤールが「アメリカの原

光景は砂漠である」と喝破したのと同断であろう。シャトーブリアンの「ロマンティックな自然児」は多くの涙を流させたであろうが、その後には冷徹な作家の眼差しがあったのである。

ところで、実を言えば、一九世紀前半には、フランスだけでなくイギリスでも反米感情が再燃している。他方、アメリカでは、一八一一年から連邦議会で対英開戦を主張するタカ派が台頭し、翌年には、第二次米英戦争とも第二次アメリカ独立戦争とも呼ばれる一八一二年戦争が勃発している。この戦争は、ナポレオンの大陸封鎖、イギリスの逆封鎖により、アメリカの中立貿易が大打撃を受けたことが直接の契機であるとされるが、当時のヨーロッパとアメリカの関係、とくに仏英米の三角関係をよく表わしている。

おもしろいもので、この時期、対米関係が悪化したフランスではアメリカへの反発からなのか、イギリスひいきが起こっている。それゆえ、イギリスで、フランセス・トロロプの『アメリカ人の内部事情』（一八三三年）なる反米的な小説の仏訳版が出ると、シャトーブリアンが評価し、スタンダールが手を叩いて喜んだという。なお、このホイッグ党員の女流小説家の作品は当時ヨーロッパ中で数カ国語に翻訳され、評判を呼んだそうである。

周知のごとく、スタンダール（本名アンリ・ベイル、一七八三—一八四二）は名作『赤と黒』『パルムの僧院』などの作者である。こよなくイタリアを愛し、「ミラノ人、アリゴ・ベール」と自称したこの作家は、「幸福追求」を生の上の目的とした。スタンダール本人はもとより、その主人公ジュリアン・ソレル、ファブリス・デル・ドンゴを特徴づけるもの

は、「個人主義、生の活力、強烈な情熱、冒険的な生、快楽趣味、幸福への欲求」であるが、これらは祖国解放のために戦う自由主義者——炭焼き^{カルボナリ}黨員とカルネサンス期の沸騰するイタリア社会のそれである。まさに、ベイルスム（スタンダール哲学）のヒーローたちは「生きること・恋すること・感じること・味わうことに食欲な精神」の持ち主なのである。

たしかに、こうした特徴はロマン派のものでもあるが、シャトーブリアンやラマルティエヌのロマンティスムのものではない。スタンダールはまた、ヴォルテールの精神に強く刻印された「一八世紀の継承者」でもあり、「ナポレオンの弟子」でもあるのだ。彼は宗教的感情とは無縁だし、叙情性や雄弁など無視するが、厳格な分析家であり、一九世紀の俗物的ブルジョワジーには徹底した批判と皮肉を浴びせる——彼自身、グルノーブルの上層ブルジョワジーの息子であるが。

また、『赤と黒』の副題が「一八三〇年代史」であり、『パルムの僧院』が優れた『イタリア年代史』であるように、スタンダールは時代と社会、その精神を確実に捉え、活写している。彼の小説世界のヒーローの多くが個人と社会の対立的観点から描かれるのは、そのためである。モンマルトル墓地に眠るスタンダールの墓碑銘は、「ミラノ人、アリゴ・ベール、書いた、愛した、生きた」となっているが、たんなるエピソードではなかったのである。

そうしたスタンダールに否定的なアメリカ観がある。例えば、『赤と黒』の第一章「小都会」で、「フランシュ・コンテの最も美しい町の一つ」ヴェリエールを舞台設定の一つとして描きながら、この架空の町を息の詰まるような地方都市の象徴とし、一九世紀的な俗物的ブルジョワ性の凝縮された社会をバリと比べている。

「実際、この賢明な連中がこの町でじつに不愉快な専制政治を行なっている。パリと呼ばれるあの共和国で生活した者にとって、こういう小都会の暮しが耐え難いのはこのいやな言葉のためである」。

そして、この比較・連想はパリ対ヴェリエールに止まらず、アメリカにまで及ぶ。「世論の専横、それも何という専横か！これはフランスの小都市でもアメリカ合衆国でも同じく愚劣なことなのだ」。スタンダールにあっては、アメリカとはプチ・ブルのフランスの小都市ヴェリエールと同類なのである。以後、こうしたアメリカ観はリフレインとなってスタンダール作品に現れる。

『パルムの僧院』では、モスカ伯爵が「オペラ座もない」索漠たるところでは退屈だろうとファブリスのアメリカ行きを案じている。ファブリスはファブリスで、ワートルローから戻ると、聖職者への道は断念し、しばらくはニューヨークに行ってアメリカ共和国の市民、兵士になろうと考えていた。だが、獄中で、要塞司令官の娘セシリア・コンティと巡り会ふと、もう恋する女のもとにいたいことを願ひ、アメリカのことなど念頭にない。ファブリスのパトロンヌで、この血の繋がりのない甥を愛しているサンセヴェリーナ公爵夫人はもっと辛辣である。ファブリスを諫めてこう言う。

「大変な思い違いだね、あなたは！もう戦争なんかないし、またカフェなどの生活に戻るだけでしょ。ただしエレガンスも、音楽も、恋もない生活だね」「私の言うことを信じてちょうだい。あなたや私にとっては、アメリカの生活なんて淋しいもののよ」。

公爵夫人はさらに畳みかけて、アメリカには「ドルという神」への信仰があり、町なかの職人にも敬意を払わねばならず、彼らが投票ですべてを決めてしまうと言う。

また、未完の大作で、作者自身、『赤と白』とも呼んだとされる『リュシアン・ルーヴェン』（一八三四年）では、スタンダールのアメリカ観はさらに辛辣・鮮明である。「スタンダールが自己のもっとも多くを注入したのはこの小説の主人公」、即ちリュシアン・ルーヴェンだからである。

パリの富裕な銀行家の息子であるリュシアンは自己の人間の価値を試すために槍騎兵少尉となってナンシーに駐屯する。ある晩、部隊の若き共和主義者たちから連帯を訴える手紙を受け取る。そして沈黙考し、長い独白が続く。

「みんなアメリカへ渡ったほうがいいだろうが：おれも一緒に行くことになるのか？…いや、行くまい、と彼はつぶやいた：アメリカでは、まあこのうえなく公正で合理的だが、粗野でドルのことしか考えない連中の中で退屈するだろうな」。

以下、リュシアンならぬスタンダールの皮肉なアメリカ観が披瀝される。向こうでは、十頭の雌牛が春には十頭の仔牛を生むなんてことが話題になるだろうが、自分はオペラ歌手の品定めでもしていたほうがよほど良いという。

「いかに高潔だと言っても、洗練された考えの持てない人たちは暮らせない。墮落した宮廷の風俗のほうが百倍もましだ。ワシントンなんてとても退屈な男だろうから、おれはタレーラン氏と同じサロンにいるほうがいい：おれには旧文明から生まれた楽しみが必要なんだ」。

これはまるでエビキュリアンたるスタンダール自身の信仰告白である。タレーランから発し、ボードレールを予告するようなこのアメリカ嫌いの独白はクレッセンドで終わる。

「おれはアメリカ人の退屈きわまりない良識など、ぞっとする。アル

コレ橋の勝者、若きボナパルト將軍の伝記物語はおれを熱狂させる。これはおれにとってホメロス、タッソーなのだ。いや、それよりも何倍もいい。アメリカ人の道徳観なんておそろしく俗悪な気がして、彼らの名士が書いたものを読んでも、一つの欲望しか起こらない。それは、この世では決して彼らには会いたくないということだ。この模範国は愚劣で利己的な凡人どもの勝利した国のようで、しかも、この連中の機嫌をとらねば生きていけない始末だ」。

このリュシアン、前記のモスカ伯爵、サンセヴェリーナ公爵夫人、つまりはスタンダールの告白で注目すべきは、フランスのアメリカ観において、一九世紀前半すでに「文化的なもの」が「政治的なもの」を凌駕しつつあったことである。現に、リュシアンは自虐的にこうも言っている。「じゃあ、間抜け野郎、この旧文明の産物たる墮落した政府でも支持することだな」。

たしかに、スタンダールは国王や司祭が牛耳る旧世界に心底反対する、いわば政治的・思想的反逆者であったが、そのヒーローたちは正統王朝派のバルザックのヒーローたちのアメリカ観と変らないし、その口調は玉座と祭壇、死刑執行人の擁護者ジョゼフ・ド・メーストルのものと同じである。おそろしくこうした反米的感情がフランスの小説に登場するのは、スタンダールが初めてであろうが、爾後、これが、いわばフランス国民の実存的な「偏見」となっていくのである。

ただし、注意しておくべきは、こうした「偏見」は当時、イギリスの反米感情にかなりの影響を受けていることである。前記のトロロブ夫人だけでなく、チャールズ・ディケンズ（一八一二—一八七〇年）のようなイギリスの国民的作家にさえ、アメリカを旅して悪印象を持ち帰った

『アメリカ覚え書』（一八四二年）があるという——もっとも、ディケンズは晩年、再度アメリカを旅して、熱狂的な歓迎を受けたそうだが。この時代、フランスはそうしたイギリスの反米感情を下敷きにして、フランス式の反米感情を文学作品で表現したとも言える。ともあれ、ワシントンよりはタレーラン、デモクラシーよりはオペラのほうがいいというフランス式「偏見」が根付きつつあったのは、確かであろう。

ところで、『赤と黒』とほぼ同じ一八三〇年代、このアメリカン・デモクラシーを研究・評価したフランス人がある。アレクシス・トクヴィル（一八〇五—一八五九年）である。この一九世紀のモンテスキューと称せられるトクヴィル伯爵は、前出のシャトープリアン子爵とは、有力な啓蒙主義的政治家マルゼルブ（一七二一—一七九四年）を介して親戚関係にある。マルゼルブの孫娘のひとりが出くヴィルの父に嫁し、他のひとりがシャトープリアンの兄に嫁いでいる。ティボーデによれば、「トクヴィル氏がのちにアメリカから民主主義を持ち帰るがごとく、シャトープリアンはアメリカから絵画的美意識を持ち帰る」。

この老マルゼルブは、最期は断頭台の露と消えたが、積極的なアメリカ嫌いであり、情報にも通じており、シャトープリアンにアメリカ行きを勧めたのはこの人物である。トクヴィルのほうは自らアメリカ旅行を考えていたらしく、「ぼくはそこへ（アメリカ）へ行つて、偉大な共和国がどんなものか見たい」という手紙の一文を残しているという。

なお、当時、自由主義者の旅行はモンテスキューやヴォルテールに倣つて、イギリス旅行が通例であった。モーロワ『アメリカ史』によれば、「当時（二八世紀）のすべてのフランス文化人はイギリス最良であった：知識人はロンドンへ行き、思想家としての免許を得ることに努めた」、

という。だが、トクヴィルはアメリカを選んだのである。もっとも、アメリカで見聞したことの確認・比較のためもあって、彼も後にはイギリスに短期間滞在しているが。奇しくも、二〇〇五年は、モンテスキューの死後二五〇年、トクヴィル生誕二〇〇年の節目にあたる。

ところで、トクヴィル家は、父方クレレル家からは、ウィリアム征服王（十一世紀）の頃まで遡る、ノルマンディ地方のきわめて古い家系であり、十七世紀からトクヴィルと名乗っていた。また祖母の系統は聖ルイ王、チェザレ・ボルジアなどの末裔であるという。しかし、母方はこうした世襲の封建貴族ではなく、法服貴族に連なり、母ルイーゼはパリ高等法院長の娘であり、マルゼルブの孫娘である。いずれにしろ、トクヴィルは貴族階級の出である。その彼に『アメリカの民主主義』（一八三五―一八四〇年）なる名著がある。

貴族でありながら、この時代にこれほどの客観的精神で民主主義の研究をなしたことは、やはり驚きである。たしかに、彼は貴族的な価値観を捨てたわけではないが、一九世紀という非貴族的社会にあって、貴族階級の最も貴重な遺産、とくに個人の自由と尊厳、権力の均衡と中庸を説き、伝えようとした。ギゾーは、トクヴィルは「敗者の貴族として、（相手方の）勝者が正しいと確信して近代民主主義を」考察していると語ったそうだが、これは正鵠を射ている。

この一九世紀の『法の精神』とも言われる『アメリカの民主主義』は、「明け方の」アメリカ共和国の姿をフランス人に伝えたと言われているが、その思想の近代性にもかかわらず、当初はともかく、一九世紀中はほとんど読まれることはなかった。もちろん、慧眼なる読者に、シャトープリアン、ヴィニー、ラマルティヌ、ギゾー、ジョン・スチュアート・ミル、ジョン・クインシー・アダムズ（アメリカ第六代大統領）など錚々

たる人物がいたが、実際は「有名だがもう誰も読まない本」だった。前記ランソンによれば、「その理由は、凡百の読者にとっては思想がありすぎるからである。機知も洒落もなく、楽しみや息抜きになる表現も皆無。事実・判断・予測が厳格かつ力強く連なる文脈なのである」。

それゆえ、識者たちがかくも豊かで斬新な思想を秘めた著作の真価に気づいたのは第一次世界大戦直後からであるという。その真価とは、トクヴィル思想における近代性、即ち「専制政治、消費社会の内部に人格が埋没する危険性、官僚的な絶対主義の不条理性などへの告発・警鐘」であり、現代社会の問題系や矛盾に通じるものである。トクヴィルの洞察力の卓越したところは、形成期のアメリカ社会の実態を見聞・考察しながら、「アメリカの民主主義はその基本的特徴をピューリタンの遺産に負う」という本質を見通し、その考察を普遍的領域にまで高めていることである。つまり、彼は自由主義者に起こりうる欠陥や病を予想しつつ、平等の原則に基づく民主的な社会状態とは自由主義的民主主義にもなりうるし、専制政治にもなりうる可能性を秘めていることを指摘したのである。

ところが、こうしたトクヴィル思想はその先見性・普遍性にもかかわらず、前述したように、同時代にはほとんど顧みられず、むしろ反米的な風潮に利用された。彼を引用する者はごく稀で、誰も彼の説に反論しようとする者はいなかったが、その名前だけは反米的言説になかば儀礼的に登場していた。トクヴィルはアメリカの現実を潤色して語り、アメリカン・デモクラシーをまるでいんちきな砂糖菓子売りつけるように、フランス人に売り込んだというのである。例えば、一九世紀後半、パリでスキヤンダルを呼んだ『アンクル・サム』（一八七三年）なる三文劇では、トクヴィルの『アメリカの民主主義』は「砂糖まぶしのアメリカ」

だと切り捨てられているという。

また、このトクヴィルの著作で、一世紀以上もの間、フランスで最も好んで引用されたのは、第七章「合衆国における多数派の絶対的な力とその影響について」であるとされるが、その中の項目「アメリカで多数派が思想に及ぼす力について」にはこうある。

「私は、一般に、アメリカほど精神的独立や真に自由な議論の少ない国を知らない」「アメリカでは、多数派が思想の周りに恐るべき円を描く。その境界内では、作家は自由である。だが、そこから出ようとする者には災いあれとなる」。

こうしたトクヴィルのネガティブなアメリカ観は他にも多々ある。例えば、下院は信じがたいほど俗物の集まりであるとか、アメリカ社会の道徳蔑視は成り上がり者のそれであり、君主制度の「権力者」の背徳よりも危険である。アメリカでは、知的なものは「不人気」であるとか、そこではすべてが喧騒と変動であり、社会の様相は「不安かつ単調」である、など。

おそらく、こうしたアメリカ社会の現状を伝えようとした、トクヴィルの批評的言辭がその言葉尻をとられて、曲解・悪用されたのであろう。例えば、この第七章のすぐ後に第八章「合衆国で多数派の専制を緩和するものについて」がくるが、反トクヴィル派はこれを無視するか読んでいないのだ。だが揚げ足を取っただけでなく、反米派が忘れていたのは、トクヴィルが旅したアメリカは独立してまだ半世紀も経っていない新興国であることだ。国家体制が不備・不安定で、人心・世論にまともがないのは当然であろう。現に、彼の旅行の三〇年後には、南北戦争が起ころのである。

それに何よりも注目すべきは、トクヴィル自身が万事を承知していた

ことである。『アメリカの民主主義』の序文において、彼はこう警告している。「読者諸氏は、私が〔アメリカに〕賛辞を呈しようとしたとお考えならば、妙な思い違いをすることになろう」。そして、自分は単に好奇心からアメリカ社会の現状報告をしたのではなく、この若い共和国における民主主義の有り様を検討し、その本来のあるべき姿を普遍的な観点から検討し、それが人類に益するものかどうか考察を試みたのであるとし、こうも言っている。「私はアメリカでアメリカ以上のものを見たことを認めよう」。

さらには、自分がアメリカで見聞したことをうまく伝えられたかどうか分らないが、事実を曲げて思想に訴えようとしたことはなく、公正な記録・文書類を論拠にし、確かな筋の情報や複数の証言をもとにしたという。そして、その一例として当時の國務長官エドワード・リヴィングストーンへの援助・協力に対し謝辞を述べている。

最後に、トクヴィルは『アメリカの民主主義』に対する読者の反応さえも予測している。「私は、いろいろと配慮したにもかかわらず、誰かがいつか本書を批判しようと考えるならば、これほど容易なことではないということは承知している」。そして、この本では、論すべき対象がきわめて多様なので、一つの事実とか思想を孤立した部分的なものとしてではなく、全体を流れる根本思想 *pensee m re* と関連づけて読んでほしいと願い、序文をこう締め括っている。「私は何らかの党派とは別な見方をするのではなく、それよりも先を見ようと試みた。彼らが明日のことを思っているのに対し、私はそれより先の未来のことを考えようとしたのである」。残念ながら、この予測はあたり、一九世紀フランス・ブルジョワジー社会の読者は一部を除いて、トクヴィル思想の真価が分かなかった。

さて同じ一九世紀に、トクヴィルとは別な観点からアメリカを見、別なアメリカの「未来」を予見していた詩人がいた。『悪の華』の詩人シャルル・ボードレール（一八二一—一八六七）である。

このフランス詩歌に「新しい戦慄」をもたらしたとされる『悪の華』（一八五七年）とは、近代市民社会の爛熟腐敗の中から咲き出した花、いわば毒を含んだ妖花、「病める花」である。詩人自らが言うように、「悪から美をひきたすこと」によって、咲き乱れた花である。

ここで言う近代とは、七月革命のルイ・フィリップ時代から二月革命を経て、ルイ・ナポレオンの共和国、ナポレオン三世の第二帝政に至り、やがてパリ・コミューヌの革命を経験することになった一九世紀フランスのブルジョワジーが生きた時代である。つまり、ルイ・フィリップの王国が大地主や銀行家の大ブルジョワジーと固く手を結び、王権が二月革命によって倒れた後もブルジョワジーの支配がますます強固になって続く時代である。

『悪の華』はその大部分が一八四〇—一八五〇年代に書かれるか、または構想されたというが、この時期から第二帝政に至るまでのフランス社会における政治・道徳の頹廃はすさまじかった。ボードレールは「王政復古時代の典雅な壁飾りを、第二帝政期のパリの街頭に引き下ろした」のである。詩人はそこに資本主義社会の悪徳を見、俗臭ふんぶんたるブルジョワジーの墮落を感じ取ったのであろう。『悪の華』の最初に考えられた題は『冥府』であったが、この冥府とは「産業的不幸の時代」を含意するものだという説もある。

ボードレールの詩的世界は一九世紀パリを唯一の舞台背景とし、その題材を詩人の直接的経験、それもボヘミアン、街の女、自由主義的芸術家などと織りなした体験から取ったものであるが、彼の描く人間像は、

ヴェルレーヌがいみじくも言ったごとく、「本質的に近代人」である。それは、「過度の文明の洗練によって生まれた近代人、鋭くうちふるえる感覚、痛ましいまで繊細な精神を備え、その脳髄は紫煙で満たされ、その血は酒で火照った近代人、要するにこの上なく胆汁質の神経過敏な近代人」である。

ボードレールの卓越したところは、一九世紀フランス社会のスクランダラスな具体的現実を見つめながら、そこにうごめくそうした人間像を凝視しつつその真相を捉え、「魂と肉体との充足を求めても得られぬ西欧近代人」の懊悩を一般的・普遍的な人間の実存として提示したことである。換言すれば、『悪の華』の詩人はそうした近代に巣くうデカダンス、そこに潜む「人間の本源の邪悪性」を鋭く嗅ぎ取り、それを人間性の奥底まで掘り下げて洞察し、近代の憂愁として謳いあげ、秋の黄昏の入り日のごとく輝かせたのである。喩えて言えば、『悪の華』は、「地獄に根を下ろしながら、天上に憧れの枝を張る巨木」のようなものであろう。

たしかに、ボードレールは、シャトوبرリアンやトクヴィルのように大西洋を渡ったわけではないが、詩人の直観と洞察力によって、この同じデカダンスが勃興期のアメリカ社会にもあり得るものと見ていた。ボードレールには、『火箭』と『赤裸の心』を総称して、一般に「日記」或いは「手記」と呼ばれるメモ書き風の遺稿集があるが、『火箭』二二のなかに次のような一節がある。

「機械の発達は我々をアメリカ化し、進歩は我々のうちにある精神的部分をすっかり萎縮させてしまう……」。この「アメリカ化する」という動詞は、英語では *americanize* がすでにあり（一七九七年初出、ランダム・ハウス）、フランス語ではボードレールがこれと同義の *américaniser* を作り出したとされている。例えば、フランス語辞典『ル・グラン・ロ

「ペール」には一八五五年初出として、この『火箭』の一文が引かれている。だが、ボードレールが初めてこの語を使ったのはおそらく一八五五年のパリ万国博覧会について、『祖国』紙に載せた「批評の方法」という論説においてであろう。そこにはこうある。

「この哀れな男は、動物支配主義的で実業家的な哲学者によってすっかりアメリカナイズされているため、物質界と精神界、自然的なものと超自然的なものとをそれぞれ特色づける差異についての観念を喪失してしまったのである」。

ところで、この『火箭』という題名は、『冥府』や『赤裸の心』同様、アメリカの作家エドガー・アラン・ポー（一八〇九—一八四九）から取ったものとされるが、ボードレールは、この破壊型の孤絶的な高踏派的詩人・作家に心酔し、「詩人としてエドガー・ポーは別格の人間である」として、その作品を翻訳・紹介している。この「氷のように美しい詩」（アンドレ・モーロワ）を書いたアメリカ詩人に魅惑されていたのである。

ボードレールの年譜を見ると、彼は、『黒猫』の仏訳を読んで以来ポーに取り憑かれたかのように、自らの詩作とほぼ同量のベクトルでポーの作品の翻訳に心血を注いでおり、詩と評論を除いてそのほとんどすべてを訳出している。またそうした翻訳の冒頭に付された論文「エドガー・ポー、その生涯と作品」（初稿）、これとはかなり異なる「エドガー・ポー、その生涯と作品」、さらに「エドガー・ポーについての新しい覚え書」、「ポーについての雑稿」などの評論があるのに加え、『火箭』、『赤裸の心』にもポーに関するメモ書き風の文がある。

こうしたポー論を読むと、ボードレールはこの新大陸の不遇の作家のなかに自分との精神的血縁性を認め、その訳業を通して意識的にも無意識的にもポーに自分を同化させているような観がする。この二人の詩人

の想像空間での出会いは、近代の西欧文学史上、稀有の出来事であろう。まさに「ボードレールは完全にポーその人になっている。そして、ポーその人になったことにおいて、ボードレールはボードレール自身となっている」。彼のポー論は優れた作家論であるが、そこで取り上げられた諸問題は「ボードレールに源を発するフランス象徴主義詩派の美学の中心的綱領となる本質的な問題」でもあり、その文学史の意味は重要であるとされる。だが、我々がここで注目すべきは、ボードレールがポーを語る際に展開するアメリカ観である。『悪の華』の詩人にとって、「アメリカ」とはどのようなものであったのだろうか。

『アメリカ紀行』のシャトーブリアンや『アメリカの民主主義』のトクヴィルと違い、ボードレールはアメリカを直接的に論じたわけではないが、ポー論をはじめとして、アメリカへの言及は随所に見られる。ボードレールには、生前に出版計画がありながら、未刊に終わった論評やノート類が多数遺されているが、その一つに「哀れなベルギー」という一種の文明批評がある。

これは、一八六四年、講演旅行でブリュッセルに滞在しており、パリの「フィガロ」紙に「ベルギーからの手紙」として連載し、後に一冊の本にまとめようとしたが実現しなかったノート・資料類が遺稿として整理されたものである。ノート・資料類とは言え、かなりの分量で、冒頭にまずこうある。「書名の案——〈真実のベルギー〉、〈赤裸のベルギー〉、〈裸にされたベルギー〉、〈お笑い草の首都〉、〈猿の首都〉——?」。これからも類推できるように、これはベルギーを裸にして、罵倒し尽した本である。よくもまあこれだけ悪口雑言を並べ立てたものである。ボードレールがベルギーで被った不遇への恨み、死の三年前の、極度に悪化し

た健康状態からくるパラノイア的不機嫌を考慮しても、一読して嘩然とせざるを得ない。

ただし、こうしたベルギーへの悪口も大部分は、当時フランス人のベルギー旅行者なら誰でも口にした紋切り型を踏襲しただけであるという。それに、あのロマン派一流のグロテスク趣味を受け継いでいたボードレールが、ここでも「ダンディ」独特の韜晦的悪趣味を発揮したのだろう。したがって、これをたんなるボードレールの個人的な状況からのみ解釈してはならない。それに、この「哀れなベルギー」にはもちろんベルギー社会や風俗への罵詈雑言だけでなく、フランドル絵画に対する見解、教会や建築物に関して粗描される一種のバロック芸術論もあり、美術批評家としてのボードレールの姿も見られるのである。

ところで当時のベルギーは、一八三〇年にオランダから独立してまもなく、アメリカと同じく新興国であった。この頃（一八六〇年代）は、ナポレオン三世に反対するフランス共和主義者が多数ベルギーに亡命していたが、ボードレールはおそらくそうした人士とも交わりつつ、「若いベルギー」社会を観察・体験し、そこに「近代社会」の縮図を見、人間の本源的な俗悪さを感じ取っていたのだろう。

ここで見落としてならないのは、ボードレールがこの「若いベルギー」と「若いアメリカ」を同次元に置いていることである。例えば、この草稿の前書きにこうある。「二〇年前、フランスで、いかにアメリカ合衆国の栄光と幸福が謳歌されたことか！ベルギーについてもそれと同じ馬鹿騒ぎだ」「ダントン。鯉と兎。アメリカとベルギー」。以下、アメリカと名指しこそないが、ベルギー社会とベルギー人への諷刺・批判がそのままアメリカ社会とアメリカ人のそれに繋がるのである。つまり、同じ功利主義、同じセンチメンタリズム、同じ大衆的付和雷同、同じ天才蔑

視、同じ「商店臭」があるという。

だが、ボードレールのアメリカ観を知るには、やはりポー論を見なくてはならない。『悪の華』の詩人にとって、ポーは敬愛すべき「大西洋の向うの唯一のロマン派詩人」であり、彼を生んだアメリカは「美の觀念の最も敵意にみちた相手である実用性の觀念があらゆるものに先だって支配権をふるっている国」である。

ネルヴァル（一八〇八—一八五五）がパリの裏町の一角で縊死体となって発見されたごとく、ポーも飲酒のため人事不省となって変死、いわば酔死（？）する。ボードレールは、ポーは「いわばどぶのなかで死んだのだ」と言うが、単に実用・功利主義的なアングロ・サクソン族の国の犠牲者、殉教者ではない。ポーは、「詩はリズムを伴った美の創造である」として、詩や散文の領域に理想美や絶対美の世界を構築すべく「我々のために大いに苦悩した」詩神的存在なのである。

例えば、『火箭』の一節にこうある。「毎朝、あらゆる力、あらゆる正義の源泉たる神に、また仲介者として私の父に、マリエットに、及びポーに祈りを捧げること」。そして「エドガー・ポーとその母国（アメリカ）とが同じ次元に属していなかった」ことを確信し安堵するのである。「アメリカとは、ポーにとって宏大な檻であり、銭勘定の一大機関」であったのだ。

『エドガー・ポー、その生涯と作品』において、ボードレールがポーの生と死を語ることはそのままアメリカ社会への告発状の観を呈しているが、その際興味深いのは、付随して語られる「進歩」とか「民主主義」に対するボードレールの考え方、またそこから生じるアメリカ観である。もちろん、この二つの理念への言及はこれ以外の作品でも随所に見られる。それらは技術と産業の発展によって大きく変動していく一九世紀と

いう物質至上主義的西欧社会、とりわけアメリカ社会を象徴するものである。この進歩という「衰弱の一大異説」に対するボードレールの批判は、以下のごとく痛烈である。

「進歩への信仰は怠け者の教義」「進歩」ほど馬鹿げたものはない。なぜなら、日常の事実が証明しているように、人間はいつまでも人間と同類で、人間から変らない、つまり、いつでも野蛮な状態にあるから」「進歩とは（進歩がそこにありさえすれば）楽しみを洗練するにつれて苦しみも完成してゆくものであり……人々は……一瞬ごとに失われる征服、つねに自分を否定する進歩を追い求めるものである」「文明人は進歩の哲学をあみだしてその機能喪失と失格について自ら慰めたのである」「私がまるで地獄を恐れるかのように警戒している一つの重大な過誤で、非つねに流行しているものがある——進歩の理念」「進歩というものは、彼ら（蒸気機関や化学マッチの哲学の信奉者）の目には、無限の系列という形でしか現れないのだ。どこにその保証があるのか？」

民主主義についても同じく辛辣である。

「ヴィヨ（法王至上権主義者、ボードレールの論敵）は世界の民主主義が全部彼の胸中に逃げ込んだかのように、粗野で、芸術の敵である」「民主的社会的世論の独裁権とはなんと情け容赦もないことか」「民主主義には多くの不都合な点があること、民主主義は自由に対して愛想のよいマスクを被っているにもかかわらず、必ずしも個性の伸張を許さぬこと……合衆国では世論という、君主制のそれよりもはるかに残酷で容赦のない専制政治が存在するという話」（これなどはトクヴィルの警告を思わせるが）。

こうしたボードレールの進歩観や民主主義観はポーのそれと類似している。ポーは、人間としてはおよそ欠点だらけで、飲酒癖と貧窮に苦悩

した人生の敗残者だが、詩人・作家としては時流に抗してオプティミストな進歩主義を否定し、当時の米国民民主主義を諷刺批判している。例えば、短篇「スフィンクス（大蛾）」（一八四六年）にはこうある。

「民主制の完全な普及は人類一般にいかなる影響を及ぼすか、それを正しく評価するためには、民主制が完全に普及しうるような時代は今からどれほど後のことであるか、という問題がこの評価の中に取り入れられずにはすまないだろう」。

ポーがこう書いたのは、アメリカ人には「自由と民主主義の理想を他国民にもたらす使命がある」とする Manifest Destiny（アメリカの天命）論が出た頃である。現在のアメリカの姿を想起すれば、ポーの詩人としての先見性に富んだ直観、深い洞察力のほどが分かり、実に興味深い。ボードレールは、ポーは三つのすがた、即ち批評家、詩人、小説家のもとに現れるが、「さらにこの小説家のなかにはひとりの哲学者がひそむ」と書いている。卓見である。こうした根底的な意味で、アメリカという国は二〇〇年前から本当に「進歩」したのだろうか、と訝しくなる。

また、ボードレールのポー論にはこうある。「物質に飢えた、大食いの世界のさなかから、ポーは夢の世界に身をおどらせた」。彼は「アメリカ流の雰囲気息詰まりそうになって、『ユリイカ』を書き、『いわばみごとに異議申し立て』をし、さらに『モノスとユナスの対話』のなかで、民主主義や進歩と文明についての軽蔑と嫌悪を思うさま述べ立てた」のである。そしてこう糾弾する。

「さまざまの奇怪な思想のうち、万人平等の思想が広く普及した。類推を無視し神をもはばかりず——天地間の万物にまぎれもなく適用されている階級の法則が、声高く警告していたにもかかわらず——あまねくデモクラシーを普及させようといふとんでもない試みがなされたのだ。

しかしこの悪は、悪の主役たる知識から、必然的に生じたものだ。

ただし留意すべきは、ポーにもボードレール同様貴族趣味があるが、後者の場合、群衆や人民を愚弄したり、民主主義を嫌悪したりしても、政治的な主義主張をしているのではなく、ダンディズムという精神的貴族主義を表明していることである。ダンディとは教養ある知的選良であり、群衆、人民とは正反対の存在なのだから。こうした観点を考慮した上で、ボードレールがアメリカ像を具体的にどう思い描いていたかを見よう。

まずポー論から見ると、アメリカとは「何百万という主権者がいて、はつきりと首府と呼ぶべきものもなく、貴族も存在しないような国」であり、「その老いたる母親であるヨーロッパおよびむかし日の哲学に向かって罵りの言葉を投げかける」。「合衆国とは巨大でこどもじみた国であり：旧大陸を嫉妬している。異常でほとんど怪物じみたともいうべきその物質的發展を誇って、この歴史における新参者は単純にも産業の全能を信じている」。

ボードレールはこの頃から今に続く仏米の「危険な関係」を予見していたのである。ポーにしろボードレールにしろ、天性の詩人の直覚的観察の鋭さには瞠目すべきものがある。ボードレールの諷刺はなお続く。「アメリカでは己がパンを力ずくで手に入れる必要があった」。「若い成金国民」にとっては、「趣味の腐敗はドルの増加に比例する作用」となる。

しかしながら、見誤ってはならない。ボードレールは単に、一度も会ったことのないエドガー・ポオに仮託して、一度も行ったこと見たことのないアメリカを単に表層的に諷刺・批判しているのではない。『悪の華』の詩人の眼光はするどく、はるか未来を透視しているのである。

『火箭』二二の一節に、「世界は終りに近づいている」という語句で始まる長いくだりがある。この「終り」とは、世界が「アメリカ化されて」終わるということであり、「世界が存続しうる唯一の理由は、世界が現に存在しているということだけだ」となる。ここで、ボードレールは予言者の立場に立つが、自虐的に認めることとくピエロ的予言者である。

「私は自分の中にときとして予言者の滑稽さがあるのを感じる：私は疲れ果てた男のようなもので、この醜い世界の中に己を失い、群衆にこずきまわされて、眼は背後の深い年月のなかに失望と苦悩しか見ず、目前にはなんら新鮮なものもなく教訓もなく苦悩もない嵐を見るのみだ」。

ここでは、アメリカ化された人類の終わりゆく不吉な定めが予見的に喚起されているが、その暗澹たる予見にもかかわらず、ボードレールはこう書く。「しかし私はこの頁を残しておこう——わが（怒り）悲しみの日付をとどめておきたいから」（「ボードレールは最初『怒り』と書いて、後で『悲しみ』に代えたという」。こうしたボードレールの苦渋に満ちた独白、とくに「嵐」のイメージは、ヴァルター・ベンヤミンの次の有名な「新しい天使」のアレゴリーを想起させはしないか。

『新しい天使』と題するクレーの絵がある。それは、じっとしたままいた場所から今まさに離れようとしている天使を描いている。その目は見開かれ、口は開き、翼は広げられている。これが、歴史の天使が必然的に取らざるをえない姿である。顔は過去に向けている。我々には出来事の連鎖が現れてくるところに、彼はただ一つ、破局しか見ず、それは絶えず瓦礫に瓦礫を重ねて、彼の足元に投げつけてくる。彼はでき得ればそこに留まって、死を目覚めさせ、潰えたものを集めたいのだろう。しかし、楽園から嵐が吹ききたり、彼の翼にはらまれ、そのあまりの強さに、天使はもはや翼を畳むことができない。この嵐が彼を、背を向けて

いる未来の方に絶えず押し流してゆき、その間にも彼の眼前では瓦礫の山が積み重なり、天にも届かんばかりである。この嵐が、我々が進歩と呼んでいるものののだ」(『歴史について』第九のテーゼ)。

ベンヤミンの新しい天使は、「ヨーロッパ文化が啓蒙の世紀以来、〈進歩〉と呼んでいたものの到達点をなす大きな破局——戦争、ナチズム——のアレゴリーである〈歴史の天使〉」として現れる。ボードレールの場合、「進歩」は、ベンヤミンのそれほど明確な指向対象はもたないが、ポーに仮託してアメリカの夜の嵐の虚空に飛ぶ火箭となつて出現する。

また、ボードレールの遺稿の中に「哲学的芸術」という未定稿があるが、詩人はそこで人間の年齢を四期に分けている。第一は幼年期で、アダムからバベルまで、第二は青・壮年期でバベルからイエス・キリストまで、第三は中年期でイエス・キリストからナポレオンまでの時期とし、「第四は老年期で我々がまもなく入ろうとしている時期に対応し、その始まりはアメリカと産業との覇権によって画される」。つまり、ボードレールのアメリカとは、実は「進歩」を象徴するこの世界の「若さ」、上昇する朝陽ではなく、人類の「老年」、黄昏へと沈みゆく夕陽の到来を告げるものとして予感されている。この詩人の予感は、一九世紀の半ば、機械や科学技術の発展により産業革命が進行し、人間社会が大きく変貌してゆく時代になされたものである。『赤裸の心』五八にはこうある。

「真の文明の理論」

真の文明はガスの中にも、蒸気の中にも、回転テーブルの中にもない。それは原罪の痕跡の減少のうちにある。

遊牧民も、牧羊民も、狩猟民も、農耕民も、食人族さえも、すべて各人の活力により、威厳により、我々西欧民族以上に優れたものでありうる。

西欧民族はやがて滅亡するかもしれない。
神権政体と共産主義。」

かくして、ボードレールの火箭は「世界の最後の炎に包まれた流星」のごとく、時代を超えてはるか無限の彼方にまで飛んでゆく。それゆえ、ボードリヤールよりも一世紀も前に、ボードレールは、この流星を仰ぐ人間界では、「非・出来事(起こりえぬもの)」の世界がすでに起こったものとして到来すること」を、来たるべき機械文明社会の弔鐘として予見したのではないか。『悪の華』の詩人にあつては、「アメリカ化」とは人類の臨床死にもなぞられているのである。

このようにして、ボードレールが進歩思想やアメリカン・デモクラシーへの否定的な見解を表明している間にも、詩人の最晩年の頃、大西洋の向うでは内戦 Civil War、「南北戦争」(一八六一—一八六五年)が勃発していた。そして意外なことにも、この戦争が大いにフランス人の関心と呼んだのである。ちなみに、Civil Warとは本来内戦、内乱の謂いであり、他に「諸邦間の戦い」なる用語もあるが、南北戦争という通称は中国やわが国の南北朝の連想からきた訳語であるという。

さて、一九世紀後半のフランスは、ナポレオン三世の第二帝政から普仏戦争の敗北に至る時期であるが、当時の政界、言論界はこの新大陸の内戦に異常なほど関心を寄せていた。この頃、旧大陸では、フランスの南方でイタリアの統一運動が起こり(一八五九年)、北方でプロイセンがオーストリア軍をサドヴァ(チェコスロヴァキア)で撃破し(一八六六年)、帝政ロシアがポーランド人の蜂起(一八六三年)を抑圧するという状況にあった。

だがそれにもかかわらず、フランスは、前述したように、新興アメリカ

共和国の分裂というあらぬ妄想を抱いて、南北両陣営の支持派に分かれて世論が沸騰していたのである。ナポレオン三世は、ビスマルクの台頭に気づかなかったのか無視したのか、「アメリカ合衆国の侵食に対する超えがたい防波堤」としてカトリックのラテン帝国を築くという野望をもってメキシコ遠征を試みたあげく、一八七〇年にはフランス北東部のスタンでプロイセン軍の捕虜になる始末であった。第二帝政崩壊である。

ところで、なぜナポレオン三世治下のフランス人はこれほどまでに南北戦争に熱中したのであるのか。本来、この戦争は黒人奴隷解放の戦いとされ、フランスには直接的には何の係わりもなかったはずである。だが、中立国フランスで南北両軍の外交官や使節代表が自軍の有利なように宣伝・ロビー活動を繰り返していた。そして奇妙なことに、パリでは、南軍支持派でありながら奴隷制廃止を唱える者が多数いた。とくに、パリ駐在の南軍のロビイストたちは、奴隷制という「特別制度」（南軍派の婉曲的表現）の廃絶は戦争目的ではなく、北軍による南部支配の口実であると喧伝していたのである。

フランスでは、もちろん、南軍支持派が圧倒的に多数で、とくに社会の上層部で強かった。こうした南軍への共感にはさまざまな理由が考えられる。まず第一は経済的な利害や貿易関係の現実からくるものだろうが、カトリック教会の熱意にも支えられていた。だがおそらくもっと強力な理由は、アメリカ南部の住民の半数はフランスの血筋を受け継いでいるという出自の神話であり、また新大陸の植民地戦争に敗れたフランス人のコンプレックスとアングロ・サクソン系の北軍への復讐・対抗心であろう。それゆえ、フランス人の多くは、アメリカ合衆国が分裂し、南部十一州が結成した「アメリカ連合国」が独立することを秘かにだが、熱烈に望んでいたのである。それはフランス外交政策の夢でもあったのだ。

しかし、当然のことながら、北軍支持派もあり、その主たる論拠となるのは奴隷制廃止だった。概して、フランス人は、「冷静で打算的な」イギリス人よりも奴隷制に対する感情的な反撥が強く、嫌悪感を示す者が多かった。それは断固たる南軍支持派も含めてである。おそらく、この頃のフランスには、啓蒙の世紀以来少しずつ育まれてきた人権思想やヒューマニズムが定着しつつあり、これが伝統的なキリスト教的ヒューマニズムと相俟ってそうした国民感情を生んだのであろう。

それに、この国では、奴隷制は単に道徳的に不当なものというだけでなく、歴史的に見て時代遅れのものと考えられていたのである。フランスはすでに二度奴隷制廃止を宣言している。革命政府下の、一七九四年、すでにユダヤ人解放に尽力したグレゴワール神父のイニシアチブにより植民地奴隷制を廃止。一八〇二年、ナポレオンが復活させるが、一八四八年、アルザス人ヴィクトル・シェルシェールが最終的に奴隷制を廃止した。ちなみに、イギリスでは、一八〇七年、議会で奴隷売買が禁止されている。

このように南軍への共感と奴隷制非難が共存するという珍現象のなかで、南軍ロビイストたちの努力の結果（？）、この南北戦争は奴隷制廃止ではなく、北軍側の覇権主義のためであるという奴隷制維持派の南軍の主張が優勢になり、この戦争は「政治的・経済的な」ものであるという言説が定着した。北軍は覇権のため、南軍は独立のために戦っているというのである。

そしてこれが発展して、この南北の対立はアメリカ合衆国の歴史的・社会構造的な違いに由来するものであるとされ、さらには「アングロ・サクソン」と「ラテン」両民族の古典的な対立にまで拡大解釈されてゆくのである。つまり、北部は工業を中心とし、宗教的にはプロテスタン

ト、民族的にはアングロ・サクソン系が主流であるのに対して、南部は農業を専業とするカトリックのラテン系の出身者が多かった。それは新大陸の植民の歴史から見ても明らかで、南部にはフランス人、スペイン人が多く、北部には主としてイギリス人、オランダ人、ドイツ人、スウェーデン人が住みついていた。この二つの異なった民族集団が、大きな距離を隔てて、別な緯度の気候風土で暮らせば、物質的経済的競争・対立のみならず、心理的文化的な対立・葛藤が生じるのも当然であろう。

こうしたパースペクティヴに立って、フランス世論では、南北戦争とは実は黒人奴隷解放のための十字軍ではなく、北軍はインディアン虐殺者であり、南部の白人種つまりはラテン系民族への「懲罰隊」のようなものであるという意見が大勢を占めた。フランス人は北軍の背後にアングロ・サクソン＝イギリス人の姿を見、かつてのメイフラワー号の子孫たちがアメリカ大陸で勢力を広げ、覇権を決定的に確立しようとしていると感じたのであろう。そうすると、この南北の対立は仏英の代理戦争のような趣を帯びて、経済的・産業的対立よりもはるかに深い民族的・文化的な溝を浮き彫りにすることになる。

おそらく、フランス人は、苦々しく、この北軍＝アングロ・サクソンの覇権主義的野望のなかに、ニューイングランドのピューリタンの「古い教義」の再来を見たのだろう。即ち、「大地とこれが擁するものはすべて聖なる者の所有物である。我々自身がその聖なる者である」、というのである。ここで忘れてならないのは、かつて大英帝国は、「交易を通して、ヨーロッパ文明をアジア、アフリカ、オセアニアなどの諸民族に教える」ことを好んだが、今度は一九世紀半ば、新大陸でその子孫たちに「マニフェスト・デスティニー」の精神が生まれたことである。こうした歴史の流れは、現在アメリカで隆盛を誇る福音派プロテスタント

の「ボーン・アゲイン」のそれに受け継がれているのではないだろうか。かくして、この新大陸における南北の対立は大むかしからの「血」と「文明」の対立のロジックに組み込まれることになる。そして一九世紀半ばから末期にかけて、「北軍＝アングロ・アメリカン＝ヤンキー」対「南軍＝ラテン＝フランス人」という対立構造の図式が生まれ、今日に至るアメリカ対フランスの「危険な関係」にまで繋がるのである。

ところで、当時は、アングロ・アメリカンに対し、「汎ラテン主義 Panlatinisme」という用語まで使われ、フランスにおける反米感情は強まっていたが、それは、大西洋の向う側でも同じで、南北戦争の勝者北軍が、第二帝政下のフランスの態度に対して抱いた恨みも後々まで残ることになる。例えば、一八七〇年、フランスがプロイセンに敗北すると、ドイツ系植民者の多いアメリカの諸都市で祝勝記念のデモが起こり、米大統領グラントはドイツ帝国の誕生を祝して、ヴィルヘルム一世に祝電を送っている。これなどはアメリカの意趣返しであろう。

そうしたなかで、フランスという国はやはり「文学共和国」である。

北軍派のウィクトル・ユゴーのような巨匠は別格としても、興味深いのは、『月世界旅行』や『八十日間世界一周』で知られるジュール・ヴェルヌに南北戦争を扱った作品があることである。しかも、その名もずばり、『ブロック破り』（一八六五年）と『南北対決』（一八八七年）の二作である。ヴェルヌは相当のアメリカひいきであつたらしいが。

周知のごとく、ジュール・ヴェルヌ（一八二八―一九〇五）は、上記の作品以外にも『海底二万里』など今日のSFの濫觴ともなる作品を残した流行作家である。おおまかに言って、その文学は、一九世紀後半のフランス社会の急激な産業発展に伴う近代化を背景に、当時の科学の未来への信仰に支えられたものであり、科学の新知識を駆使して広大な宇

宙にまで自在に想像力を遊ばせているが、ヴェルヌは現実社会のありようにも目配りを怠らず、作家の目できっちりと世界の現実を認識していたようだ。

今ここでその梗概を述べることはしないが、南北戦争終結後二〇年もたって書かれた『南北対決』と違い、『ブロック破り』はこの戦争を「ホット」に語っている。この場合のブロックとは、北軍が南軍の港に對して行なった封鎖である。当時、ヨーロッパ中で非難されたこの強攻策が英仏両国と北軍派の対立を一触即発の状態に置いていたが、ヴェルヌは、フランス人が一人も登場しないこの作品で、イギリス人ヒーローに仮託して、ナポレオン三世の願望、つまり南軍による北軍との代理戦争において勝利するという夢を描いている。もっとも、フランス人一般読者はこうした「政治的アレゴリー」とは無縁で、前述の「アラバマ号」の時の見物人と同様、野次馬にすぎなかったであろうが。

いずれにせよ、この南北戦争が「文学共和国」フランスのアメリカ観、とくに反米的感情の醸成過程において重要な一段階を画し、その後の仏米関係に大きな影響を及ぼしたことは間違いあるまい。

参考文献（ほぼ各章の順に従って挙げてある）

- ヴォルテール（高橋安光訳）『『哲学辞典』、法政大学出版局、一九八八年
 （安斎和雄訳）『『歴史哲学』…『諸国民の風俗と精神について』、法政大学出版局、一九八九年
 （丸山熊雄訳）『『ルイ一四世の世紀』、岩波文庫全四巻、一九七五年
 （吉村正一郎訳）『『カンディッド』、岩波文庫、一九七五年
 （串田孫一他訳）『『ヴォルテール、ディドロ、グランベール』、世界

の名著二九、中央公論社、一九七〇年

（根岸国孝他訳）『『モンテスキュー、ヴォルテール、ディドロ』、筑摩書房、一九六〇年

モンテスキュー（根岸国孝訳）『『法の精神』、世界の思想二六、『フランス啓蒙思想』所収、河出書房、一九六五年

ビュフォン（菅谷暁訳）『『自然の諸時期』、法政大学出版局、一九九四年
 * * *

（ベカエール直美訳）『『ビュフォンの博物誌』、工作舎、一九九一年
 ヴォルフ・レペニース（小川さくえ訳）『『一八世紀の文人科学者たち』、法制大学出版局、一九九二年

ピエール・ガスカル（石木隆治訳）『『博物学者ビュフォン』、白水社、一九九一年

トマス・ジェファソン（中屋健一訳）『『ヴァージニア覚え書』、岩波文庫、二〇〇三年

ディドロ（小場瀬卓三、平岡昇監修）『『ディドロ著作集』、全四巻、法政大学出版局、一九七六年

* * *

スタンダール（桑原武夫、生島遼一編集）『『スタンダール全集』、全一二巻、人文書院、一九六八年

ボードレール（福永武彦編）『『ボードレール全集』、全四巻、人文書院、一九八一年

エドガー・アラン・ポー（松村達雄訳）『『黒猫・モルグ街の殺人他』、世界文学全八、河出書房、一九六五年

（谷崎精二訳）『『エドガー・アラン・ポー小説全集』、一九六三年、

春秋社

ヴァルター・ベンヤミン（浅井健二郎訳監訳）『ベンヤミン・コレクション』、全三巻、ちくま学芸文庫、一九九七年

ローベルト・クルティウス『現代フランスの文学開拓者』、白日書院、一九四七年

フロイト（高橋義孝概説、菊池英夫訳）：『フロイトの思想』、世界の思想二〇、河出書房、一九六五年

* * *

サルトル（佐藤朔他訳）：『アメリカ論』、サルトル全集第一一巻、人文書院、一九五四年

フランシス・ジャンソン（伊吹武彦訳）：『サルトル』、永遠の作家叢書、人文書院、一九六三年

ルイ・フェルディナン・セリヌ（生田耕作、大槻鉄男訳）：『夜の果ての旅』、世界の文学四二、中央公論社、一九六四年

ジャン・ボードリヤール（田中正人訳）：『アメリカ』、法政大学出版局、一九八八年

エドガール・モラン（林瑞恵訳）：『カリフォルニア日記』、法政大学出版局、一九八三年

（全般的なもの）

アンドレ・モーロワ（鈴木福一他訳）：『アメリカ史』、近代文化社、一九四九年

アルベール・ティボーデ（辰野隆、鈴木信太郎監修）：『フランス文学史』、全三巻、角川文庫、一九六一年

井上幸治編『フランス史』（新版）、山川出版社、一九八五年
松村 超、富田虎男編著：『英米史辞典』、研究社、二〇〇〇年

関西学院大学アメリカ研究所編『アメリカ辞典』上巻、雄元社、一九四九年

ミシュレ（桑原武夫他訳）：『フランス革命史』、世界の名著三七、中央公論社、一九六八

その他『フランス紙 Le Monde、週刊誌 L, Express, Le Nouvel Observateur などの特集記事

Voltaire : *Essai sur les mœurs*, tome I, II, Classiques Garnier, 1963

Saint-Simon : *Traité politiques et autres écrits*, Bibliothèque de la Pléiade, 1996

Buffon : *Pages choisies*, Classiques Larousse, 11e édition

Gustave Lanson : *Histoire de la littérature française*, Librairie Hachette, 1967

Pierre Gaxotte : *Le Siècle de Louis XV*, Librairie Arthème Fayard, 1953

: *La Révolution française*, Arthème Fayard, 1938

Louis Andre : *Louis XIV et L'Europe*, Editions Albin Michel, 1950

Emile Guyenot : *Les Sciences de la Vie aux XVIIe et XVIIIe siècles*, Editions Albin Michel, 1957

Louis Reau : *L'Europe française au siècle des Lumières*, Editions Albin Michel, 1951

Diderot : *Oeuvres philosophiques*, Garnier, 1980

: *Mémoires pour Catherine II*, Garnier, 1966

Baumarchais : *Le Barbier de Séville*, Classiques Larousse

: *Le Mariage de Figaro*, Classiques Larousse

Duc de Castries : *Figaro ou la vie de Beaumarchais*, Hachette, 1972

* * *

Chateaubriand : *Oeuvres romanesques et voyages*, I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1969

Tocqueville : *Oeuvres*, 3 vols, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1992-2004

Stendhal : *Oeuvres intimes*, I, II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard 1981 : *Romans et Nouvelles*, I, II, 1982

: *Voyages en France*, 1992

Baudelaire : *Oeuvres complètes*, I, II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1983

: *Correspondance*, I, II, 1973

Victor Hugo : *Oeuvres poétiques*, I, II, Bibliothèques de la Pléiade, 1984 : *La légende des siècles*, Garneier, 1979

Paul Valéry : *Cahiers*, I, II, Bibliothèque de la Pléiade, 1980

André Suarès : *Idées et Visions, et autres écrits polémiques, philosophiques et critiques, 1897-1923*, 'Bouquins', Robert Laffont, 2002

: *Valeurs, et autres écrits historiques, politiques et critiques, 1923-1948*, 'Bouquins', Robert Laffont, 2002

Robert Pariente : *Abdré Suarès l'insurge*, Robert Laffont, 1999

Yves Hersant et Fabienne Durand-Bogaert : *Europes*, "Bouquins", Robert Laffont, 2000

* * *

Georges Duhamel : *Scènes de la vie future*, Mille et une nuit, 2003

Sartre : *Oeuvres romanesques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1987

: *Défense de la culture française par la culture européenne*, Politique étrangère, No3, juin, 1949, p.240

Michel Contat, Michel Rybalka : *Les Ecrits de Sartre*, Gallimard, 1970

Annie Cohen-Solal : *Album Jean-Paul Sartre*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1991

Rene-M. Alberes : *Sartre*, Classiques du XXe siècle, Editions Universitaires, 1967

(参考文献)

Philippe Roger : *L'Ennemi américain—Généalogie de l'antiaméricanisme français*, Edition du Seuil, 2002

Guy Sorman : *Made in USA*, Fayard, 2004

Gilles Havard et Cécile Vidal : *Histoire de L'Amérique française*, Flammarion, 2004

Bill Marshall / Cristina Johnston : *France and the Americas—Culture, Politics, and History (Transatlantic Relations)*, 3 vols, ABC-Clio, 2005

Henriette Walter : *Honni soit qui mal y pense*, Robert Laffont, 2001

Jean-Marie Colombani et Walter Wells : *France Amérique — déliaisons dangereuses*, Editions Jacob—Duvernet, 2004

Daniel Cohen : *La mondialisation et ses ennemis*, Grasset, 2004